

## 青年時代に於けるギエルレスの革命思想と 其の轉換期について

十 河 佑 貞

### 一

フランス革命及びナポレオン時代に於いてドイツの知識社會即ち所謂「學者社會」(Gelehrtenrepublik)に屬する人々の歩んで往つた思想的徑路は、世界市民主義からドイツ國民主義への方角であつた。尤も其れは、此の時代の學者思想家を個々の場合に就いて見れば、環境や性格によつて、それぞれに思想的轉換の動機や時期に遲速があり、また體驗の程度に深淺の相違が認められるけれども、彼等が「人類一般」といふ抽象的理念から、「祖國ドイツ」といふ具體的現實の問題に向つて熱中するに至つた思想的進路からいへば、之を同一の系列として考察することが出来るであらう。

ヨーゼフ・ギエルレス Joseph Görres も、この意味に於いてドイツの「學者社會」に屬する一人であつて、ゲンツ (Gentz) フレイタ (Fichte) フムボルト W. v. Humboldt アルント Arndt ヤーン Jahn シュライエルマッハ Schlegel Hegel 等をはじめ、其他多數の思想家の一群と同じ

(256)

く、世紀轉換期に於けるドイツの時代思想、否な國民思想の主流を造つた一人として看らるべきである。

一體十八世紀の末年に於いて所謂世界市民主義者を以て任じてゐたドイツの文人學者が、隣國フランスに起つた革命の共和政府の風潮、及びナポレオンがドイツで行つた改造並びに暴君的壓制政治などから受けた影響は、彼等の深刻なる精神生活の開展を示してゐる著作の中に於いて一層明瞭に現れてゐるのである。従つて之をドイツ國民思想の發展史の上から觀るならば、これらの思想家の著作は時代的所産として其處に一貫したる共通點が認めらるべきであり、またドイツ精神史を構成してゐるところの活きた斷片として看做さるべきものであらうと思ふ。

殊にイギリスやフランスなど、違つて、ドイツには過去數世紀の間、乖離の状態を續けて來たところの文化と政治、國民と國家といふものが、如何にして一致結合すべきかといふ問題が取り殘されて居つた。而して其れは、ドイツ國家がフランス革命とナポレオンといふ外的勢力に遭遇して、窮極的破滅の状態に沈淪したる結果として、はじめて其の問題が具體化され、そして實現の機運に到達したのである。即ち先づ一八〇六年に於けるドイツ史のカタストロフィを以て、其の前後を劃することが出来るであらう。何となれば此年にライン同盟の成立によつてドイツ帝國は畢に倒壊し、つゞいてプロシヤのイエナ Jena 及びアウエルシュテット Auerstädt に於ける敗戦によつて、ナポレオンに對抗す

べき國家的勢力は、最早やドイツ國土においては皆無となつてしまつたからである。とは云へ、一八〇六年を以てドイツ國家 Deutsches Reich は、破滅と同時に新生の時運に際會し、爰に多年に亘れるドイツ國民と國家との分離背反の状態を克服すべき機會が到來したのであつた。

そこで從來、重苦しき抽象的觀念の世界に深入りしてゐたドイツの「學者社會」に屬する人々も、一八〇六年以後に於いては殆ど世界市民の立場を棄て、次第に祖國の政治的現實に徹底したる信念を固持し主張するに至つてゐるのである。かういふ意味において、青年時代に於けるギエルの革命思想及び其の轉換に就いても、フランス革命及びナポレオンがドイツに及したる思想的影響を示せる一事實として認められなくてはならぬ。

## 二

さてギエルの革命思想及び其の轉換期について考察しようとすれば、先づ次の如き彼の青年時代の著作に據らなくてはならぬ。

1. 「世界平和論」 Der Allgemeine Frieden, ein Ideal. 一七九六年(二十歳の作)、一七九七年初版刊行 一七九八年改正版刊行

一、彼の刊行せし雜誌

1 「赤色新聞」 Das rote Blatt. 一七九八年二月十九日發刊——同年九月二十三日廢刊(二

## 十二歳の時

- 2 「リニェツァール」 Kùbezuhl. 一七九八年九月二十三日發刊——翌一七九九年七月廢刊(十二歳——二十三歳)

一、「巴里印象記」 *Reisebote meiner Sendung nach Paris*. 一八〇〇年刊行(二十四歳の時)

しかしてギェルレスの右の著作の中で、「世界平和論」「赤色新聞」「リニェツァール」は、その根本においてギェルレスの狂熱的親佛主義、ジャコベン主義の信念から産み出されたものである。即ち其處には世界市民主義者として、徹頭徹尾フランスの共和政治を頌揚し、ドイツ帝國の分離解體を寧ろ祝福してゐる態度が見られるのである。ところが「巴里印象記」の中に於いては、ギェルレスの親佛主義やフランス革命に對する禮讃の思想は毫も其の痕跡を認めることが出来ない。却てフランス人に對する民族的憎惡の念が顯著であり、殊にフランス革命の終局的失敗について論斷し、またナポレオンの獨裁政治の出現すべきことを豫言してゐるのみならず、祖國の文化に對する深甚なる反省と共に、民族的自覺の境地に到達してゐるのである。

而して此の「巴里印象記」以後、ギェルレスが書いた數多くの論說、評論等の著作の中には、凡て一貫して祖國ドイツの民族、文化、歴史に關する眞摯なる研究的態度、或は愛國的熱情を吐露したるドイツ浪漫主義的精神の昂揚こそ見られ、親佛主義者、ジャコベン主義者としてのギェルレスの昔日の面影は、全く消え失せてしまつてゐるのである。

そこでギェルレスの青年時代の著作の中でも殊に此の「巴里印象記」は、ギェルレスがフランス革命に感激し、熱中した最後の體驗記錄ともいふべきものであり、また世界市民主義から一轉して、ドイツ國民主義に邁進するに至つたギェルレスの精神生活における一時期を劃してゐるものと言はなくてはならぬ。

しかしながら吾々が、斯くの如きギェルレスの思想的轉換の事實を、ドイツ時代思想の一般的趨勢に對比して考へる場合、吾々はギェルレスの青年時代に於ける著作、殊に「巴里印象記」の内容については、ギェルレス自身の個人的悲痛な體驗の事情に基いてそこに特殊な意義と理由とが認められなくてはならぬ。といふのは、此の「巴里印象記」を書いた一八〇〇年に於いて、ギェルレスは既に早くも後の多くのドイツ思想家の場合において見らるゝ「世界市民的 세계觀の克服」を成し遂げて居つたからである。尤もギェルレスが反ナポレオン主義者として堂々の筆陣を張るに至つたのは、一八〇六年に於けるドイツ國家の一大轉機以後のことであるけれども、既に其れ以前において彼は、後のドイツ愛國運動の時代思潮に相通ずる所の新らしき精神力と、祖國に對する無限の愛とを體得してゐたのである。それ故に、青年時代におけるギェルレスの革命思想及び其の轉換期については、革命に對する彼自身の體驗に基いて之を考察しなくてはならぬ。

青年時代に於けるギェルレスの革命思想と其の轉換期について(十河佑貞)

四三八

それには先づ、青年ギェルレスをして革命熱に狂奔せしめるに至つたラインランド Rheinland 殊にギェルレスの生地たるコーブレンツ Koblenz が、フランス革命から受けた直接の影響に就いて重大視される所がなくてはならぬ。

### 三

元來ラインランドは、ドイツに於いて歴史的にも亦た地理的にもフランスと最も關係が深く、且つ古くからフランス文化が浸潤し來つた土地である。而してライン河の魅力は、獨佛兩民族を或は融合同化せしめ、或は分離闘争せしめる原因となり、古來幾多の歴史的事件を展開せしめてゐるが、殊にフランス革命時代において、ギェルレスの生ひ育つたコーブレンツ市は、フランス脱走貴族の集會地たる觀を呈し、ラインランドの他の都市に比して革命の影響は最も深刻且つ甚大であつた。

しかし吾々がこゝで、ギェルレスの青年時代の革命思想及び其の轉換期について見ようとする時には、彼がライン左岸共和國建設運動に奮闘した政治活動を先づ最初の出發點として、そこに考察の目標と範圍とを定めなくてはならない。即ちライン左岸共和國建設運動の由來とギェルレスの青年期の著作とは密接不離なる關係を持つてゐるからである。しかばライン左岸共和國運動とは抑も如何なるものであつたかといふに、これは要するに、ラインランドに於ける主要なる都市、即ちマインツ市 Mainz キーレン市 Köln コーブレンツ市、ボン市 Bonn 等に於いて、フランス革命に共鳴心酔したる

人々が、フランスの共和政治を軌範とする人民主權の共和政治を實施しようとして狂奔した政治的運動であつた。そして彼等は先づ「ライン左岸聯盟」 Rheinische Confederation といふ名の下に鞏固なる統一と結束とを計つて遍く同志を糾合し、この聯盟に加盟したる各都市及び町村の黨員が主體となつてゐたものである。而して其れは、ライン左岸の各地がフランス軍に占領されてから益々實際化するに至り、一七九七年の秋に先づコーブレンツ市を魁に、キェルン市、ボン市及び其他の町村等に於いて、自由樹が建立され共和政治實施の宣言式が舉行されたのであつたが、結局同年の十月におけるカンボ・フォルミオ Campo Formio の條約の結果、ライン左岸地はフランスに併合せられることとなり、更めてフランス總裁政府から派遣されたる總督が、ライン左岸地を統治することになつたのである。(拙稿「一七九七年に於けるライン左岸の共和國運動について」史苑七の四参照)

此の結果、各地の聯盟黨員は、彼等の理想としてゐたやうなライン左岸の獨立は、之を實現するに至らなかつたけれども、元來フランスの革命に感激し其の共和政治の原則に心酔してゐたので、彼等聯盟黨員はフランスとの併合を悦び、總裁政府の統治を歓迎したのである。

さて以上に述べたライン左岸共和國運動とギェルレスとの關係であるが、既に此の運動の起る前から年少氣銳のギェルレスは、コーブレンツ市に於ける愛國俱樂部(フランスの共和主義を理想とするもの)の部員中、指導的地位を占め、言論に思想にライン左岸共和國實現の理想を唱へてゐたのであ

(232)

る。彼の處女作たる「世界平和論」は、さうして此のライン左岸獨立運動の起つた時に出版され、其の代辯とも謂ふべきものであつた。

ところでギェルレスが最初「世界平和論」を書いたのは彼の二十歳の時であつて、即ちライン左岸共和國運動の起つた前年であつた。當時、此の著作の出版を應諾する書肆がなかつたので、ギェルレスは之を十七箇條の世界平和論として書き改め、巴里の執政官政府に送附したのであつたが、一向に受諾の返答を得ず、尠からず失望を感じさせられたのであつた。しかしながら其後に至り、「ライン左岸聯盟」の黨員が、ギェルレスの右の世界平和論の第十條に於いて、ギェルレスが専制君主の權力を否定し、民主的共和政治の輿論を肯定してゐるのを見て感激し、直ちに之を實際運動の指導原則として定めるに至つたのである。かくして青年ギェルレスは、爾後ライン左岸共和國運動の實踐的理論的指導者となつたのである。

しかしながらギェルレスを首め聯盟黨員の熱望してゐたライン左岸獨立共和國といふ中間國家は、遂に其の實現を見るに至らなかつたことは前述せし通りである。此の時、ボン市やキェルン市に於ける聯盟黨員は、何の躊躇する所もなくフランスとの合併を歓迎したのであつたが、ギェルレスも亦た中間國家の建設を斷念し、フランスとの合體に賛意を表した。それは一七九七年十二月下旬、ギェルレスが「ライン左岸聯盟」といふ名義によつて、聯盟黨員に發してゐる檄文によつて明らかである。

即ち「從來、巴里の總裁政府は占領地の併合といふ事よりも寧ろ其の獨立を望んでゐた其の事のために、吾々はフランスとの融合に力を注ぐことが出来なかつた。けれども今や其の融合の實は擧がり、これに因て久しい間希望してゐた目的が達せられたのである」と述べてゐる。更に同檄文中に「從來、諸侯の専制政治に對しては、如何なる平和條約も又た如何なる條約の條項と雖も彼等を束縛することが出来なかつた。これは夫の金印勅書が、如何に諸侯の貪慾を制することが出来なかつたかを見れば明らかである。然乍ら今や吾々は、フランスと結合するに至つたので、爾後は是のコロッスの重みによつて、吾々に反對する者を粉碎することができし、且つ外部からの攻撃に對しても安全を期することが出来る。自然はライン河をフランスの國境として造つたのである。フランスとの合併は、吾人が年來絶えず努力を惜まなかつた所の窮局の目的である。吾々は唯だ主義を變へたに過ぎないが、吾々は斷乎として自由の守護神を吾々の團體によつて確保したい。」以上が檄文の要旨であるが、これに據つて見ると、ギェルレスが獨立運動の主義を斷念して、只管フランスの統治に信賴し、大なる期待を以て臨んでゐる事が分るのである。

其後ギェルレスは「世界平和論」を改訂出版するに際して、その第一頁に「一獨逸共和主義者よりフランス國民へ」*der fränkischen Nation ein deutscher Republikaner* と云ふ簡單なる題文を附加し、次の如き比喩的寓意によつて、自由と共和主義に對する熱烈なる賛辭を呈してゐる。即ち、「あゝ強大

(233)

なる國民よ、余は爰に余の長男を御身に提供するのみである。彼の父の眞の似顔として、彼は專制政治と抑壓といふことに對しては、憎惡を共有してゐる。だが併し自由と共和主義に對しては、彼は灼熱したる愛を持つてゐる。余は祖國の祭壇の上で、彼を御身の脚下に跪かしめてゐる。彼は御身に好ましき贈物をなし、また彼の父を活氣づけたる所の感情を、御身に吃々として語るであらう。もし復た獨逸の國土において純粹の共和主義が芽生へつゝあるといふ證言が必要ならば、彼は御身を確信せしめるであらう。だから彼を世間の苦みの下に置いても余は後悔する所が無い。」

この文意によつて考へて見ても、ギェルレスが如何に彼の著作をフランスの共和政治に對する深甚なる喜悅と祝辭として獻げてゐるか判るのである。全くギェルレスにとつて、今やライン河は新たなヨルダン河となり、フランスは約束の地となり、巴里は新たなエルサレムとなつたのである。

更に彼のフランス革命に對する禮讃の思想が最もよく現れてゐるのは、一七九八年二月十九日から同年九月二十三日まで彼が發刊したる「赤色新聞」と題する雜誌に發表したる彼の論說である。しかして此の「赤色新聞」の第一部には、ギェルレスが一七九八年一月七日コーブレンツ市の愛國俱樂部で行つた彼の講演の内容が收められてゐる。ギェルレスは此の講演に於いて、マインツ市が佛軍の手に占領されたことを祝福し、且つカンボ・フォルミオの條約の結果、ライン左岸地方がフランスに割

讓されたことを以て、神聖羅馬帝國の解體であると呼び、其の滅亡の運命を必然的なものとして喜んでゐる。以下其の概要を記せば左の如くである。

「マインツは吾等のものである。その傲慢にして壓服しがたき要塞の壘上には、三色旗が風に翻つてゐる。かの凄慘なる噴火は、自由の軍隊の生命を毫も損傷しない。而も自由の軍隊は、今や威嚇的に且つ物凄く凡ゆる錯綜せる復仇のために、王ならびに其の黨與を打ち倒した。專制政治の星形堡は失はれ、惡評のあつた帝國保全の羈絆は引き裂かれてしまつた。再び自由を財産として所有することになつたのである。吾等の專制君主の希望は否定せられ、彼等が尙ライン左岸地方を結合してゐた所の偉大なる橋は振落されたのだ。彼等專制君主は彼方の獨逸の山の上に立つて、今や永久に彼等の通路を絶たれた所の愛すべき自由の國土を、彼等は狂はしい激怒を以て眺めてゐるのである。貴族主義者の最後の希望も無くなつた。また誇るべきドルズ Dorsius の要塞も陥落した。悲むべき哉專制君主よ！ 諸君はマインツの降伏によつて、諸君の致命傷を免れたのである。國民諸君よ！ 歡喜せよ、諸君は勝利を獲たのである。諸君の怨みを懷いてゐた軍隊（マインツの軍隊）は無力となりその勢力は絶無となつた。ライン左岸の住民諸君よ歡び給へ！ 諸君の自由を擁護するために、焰や熔岩を噴き出してゐた火山は消失したのである。」

是れ全くジャコベン主義者としてのギェルレンの面目を最も明瞭に現はしてゐるものである。又ギェル

レスは、同講演の中に、神聖羅馬帝國の老朽的存在を痛罵し、一七九七年十二月三十日佛軍がマインツ市を陥落した日を以て、同帝國の死を物語るものであると斷じてゐる。またフランスのライン左岸併合は、故人(神聖羅馬帝國)が残した不滅の紀念碑ともいふべき遺言であると述べ、「故人は、フランス共和國をライン左岸住民の唯一の正當なる女相續人として定めたのだ。そして此の尊敬すべき共和國が、ライン左岸住民の多大なる尊敬と愛との徵證として、さゝやかではあるが併しながら心から獻げたる所の贈物を受納すべき事を故人は願つてゐた」と言つてゐる。それからまた、羅馬法王に對しては、最早や其の法王廳の財政が紊亂してゐるのみならず、如何に金印勅書を鍍金しても到底信用恢復は覺束ないと斷じ、帝國軍隊は之亦た故人の遺言によつて、イギリス、アメリカ、及び東印度へ送るために、ヘッセン・カッセル Hesse-Kassel 伯に讓渡されたと云ひ、遺言執行者にはボナバルト將軍閣下が任命されたと言つてゐる。

かくの如くギェルレスは、長き歴史を有する神聖羅馬帝國の存在といふものには、最早や何等の愛著の念を有つてゐなかつた事が分る。そして神聖羅馬帝國を死人に譬へ、ナポレオン・ボナバルトを以て其の遺言執行者となしてゐるのは、頗る興味のある點である。當時ナポレオンは、イタリア征伐によつて、武名を輝かし、殊に北部イタリアに於いては、既にヴェネチヤ Venetia 共和國、キサルピナ Cisalpina 共和國、リグリア Liguria 共和國の如きフランスに從屬せる共和國が新たに建設され

てゐたので、ギェルレスはナポレオンが聽てラインランドを改造するに至るであらうと考へてゐたものと思はれる。後年、反ナポレオン主義者として有名となつたギェルレスも、フランスのライン左岸併合當時に於いては、ナポレオンを景仰してゐたのである。

かくの如く「赤色新聞」に現れてゐるギェルレスの思想は、徹頭徹尾、啓蒙思想の立場において、專制政治や教會組織に對する鋭い攻撃を行つてゐるのである。それは「從來、專制君主が用ゐる來たつた陰險なる手段も、哲學の力によつて之を明るみへ出すことが出来るやうになつたのだ」といひ、また「哲學が肚黒い魔法使(專制君主)に代り、而も國民が精神界を動かすところの力強い原動力になつたのだ」と言つてゐるのを見ても明らかである。以上はライン左岸聯盟黨員の中心人物であつたギェルレスが、如何なる立場に於いてフランスとの併合を歓迎したかといふことに就いて述べたのである。併しながら元來「ライン左岸聯盟」黨員といふものは、ラインランドのドイツ人の中でも主として親佛派のシヤコベン主義者によつて組織された團體であつて、ライン左岸住民の全體の意思を代表したものでは無かつた。それ故にラインランドに於いて聯盟黨員を除けば、他は凡べてフランスとの合體を悦ぶ者は無かつたのである。コーブレンツ市やボン市やケルン市や、また他の都市の住民の中においても、更に又、地方の農民も、フランスの新政を呪詛する者が頗る多かつたのである。

ギェルレスはフランス總裁政府の統治に對する斯る反對者を「赤色新聞」誌上で痛烈に攻撃した。即

ち「凡ての大都市は、その兒戯に類すべきものを失ふまい」として躊躇逡巡し、同業組合員は下らない彼等の特權を熱心に守り、宮廷の佞臣や封閥及び舊政府や役所の官吏たちは、計算書作製を恐れてゐる。農民は昔ながらの彼等固有の偏見と新たに宣傳された概念との中間に立つて、よろめいてゐる。彼處此處に二つの黨派が、賣坊の囁きに驚かされながら、また弱小なる專制君主の空威張りの風采に畏れを抱きながら、互に軋轢反目を事としてゐる。が其れらの黨派は、眼前に提げられた炬火に瞬きをしてゐるのだ」と皮肉つてゐる。

之を要するに、フランス總裁政府のライン左岸統治に對するギェルレスの親佛主義は、以上の如きものであつた。

#### 四

しかしながら、ラインの各都市、各地方へ赴任して來たフランス官吏は、皆傲慢不遜であり且つ非常に貪慾で人格の下劣な者が多かつた。彼等は實際の行政上の事務に際しても、毫も共和政治の民主主義の精神を重んじなかつた。又一方では、新たに官吏の地位を得た多數の聯盟黨員と、その反對に從來の地位を失つた人々との間に反目を生ずるに至つた。此の二つの事情が錯綜して、コーブレンツ市では遂に一騒動が起つたのである。

それは殊にラインランドに赴任した多數のフランス官吏や、また營利事業を目論んで移住して來た

多數のフランス人たちは、第一、土地や風俗、習慣、言語に慣れないために、自然とドイツ人との間に感情上の融合調和を缺き、剩へ彼等の殆ど凡てが自己の私腹を肥さうといふ目的で移住して來たために、ラインランドのドイツ人の反感は日々募る一方であつた。ただ聯盟黨員のみが、彼等フランス人と親むといふ風であつた。それであるからフランスが正式にライン左岸を統治するやうになつたとは云ふものゝ、實際の状態は眞の併合でも合體でもなく、全くフランスの權力によつて僅に併合政策が維持されてゐたに過ぎなかつたのである。加之フランス官吏は、革命の根本精神である自由平等の思想に理解がなく、且又、破廉恥な惡德行爲が多かつた。そこで此の結果は、これまで親佛主義を奉じて來たギェルレスをして、遂にフランス官吏に對する激しい憤懣の情を起さしめるに至つた。乃ちギェルレスは、「赤色新聞」や「リベツァール」の中で、遠慮會釋もなくフランス官吏を攻撃し、「フランス政府は、無慈悲な頭腦のない人間ばかりを寄越して吾々を治めようとしてゐる。彼等はフランス人の屑である。征服者の傲慢不遜なる態度は、日々露骨になりつゝある。だから革命の反對者は斯るフランス官吏の日常生活を見て、益々共和主義を嫌つて舊政復興を願ふやうになるのである。かくの如き盜賊にも類すべき官吏は、容赦なく之を摘發して罰すべし」と叫んでゐる。併しながら、これはギェルレスがフランスの共和政治に反對したのではなく、彼自身が言つてゐるやうに、革命の精神、フランス共和政治の理想は之を熱愛するけれども、その代表者たるフランス官吏の惡徳は、絶對に之を容赦す



(270)

べきでは無いと云ふのであつた。

とはいへ、フランス官吏の横暴に憤慨したギェルレスは、一七九八年六月二十八日、或る廢寺に彼の黨員を集め、其の時、巴里の總裁政府にフランス官吏の取締り方を請願すべきであると述べ、彼自身が巴里の元老會及び五百人會宛に認めた請願書の草稿を提示して黨員の意見を求めた。此の請願書の内容は、勿論ラインランドを統治するフランス中央行政部の抑壓政治やフランス官吏の收賄事件等を摘記したものであつて、之を總裁政府に申告しようと云ふのであつた。そして其の草稿の結語として、「盜賊は破廉恥となり、コン泥は大膽になつた。將來の不安は人心を萎縮せしめる。盜賊を殺せよ。獨裁を破滅せよ。これが吾等勇敢なる共和主義者の合言葉ではないか。さらば祖國よ、自由よ」と書いてゐる。しかし此の請願書は結局無效果に終はつたのである。

かくの如くフランス官吏の惡德行爲に對しては、ギェルレスのやうな親佛派の中心人物でさへ、之を堪え忍ぶことが出来なかつたのであるから、如何に甚しかつたか想像されるのである。殊にコーブレンツ市に於いては、フランスと併合以來聯盟黨員と一般市民との反目衝突が甚しくなつたのみならず、更にまた聯盟黨員とフランス官吏との間に不和を生じ、烈しい對立關係を生ずるに至つた。といふのはコーブレンツ市に於けるフランス官吏が、當時共和主義者を憎んで、之に敵對行動を取るやうになつたために、共和政治を最高至上の理想としてゐた愛國黨員等は、自づと彼等フランス官吏を

敵視するやうになつたためである。實際これがためにギェルレスも、「赤色新聞」を發刊後數ヶ月にして、フランス官憲の壓迫を蒙り一七九八年九月二十三日に之を廢刊とし、同日「リュベツァール」と誌名を改めて刊行し、共和政治の主義に就いては依然として之を頌揚したが、然しフランス官吏や軍人に對しては極度に非難攻撃の論鋒を向けたのであつた。それがために彼は屢々官憲から壓迫を蒙り、遂に翌一七九九年七月に「リュベツァール」を廢刊するの已むなきに至つた。抑も、コーブレンツ市に於けるフランスの官吏、軍人と、聯盟黨員との間に起つた斯る不和、衝突の原因は、當時同市駐在のフランス司令官ルヴァル Louis 將軍が、聯盟黨員を目してジャコベン主義の遵奉者であるとなし、之を嫌惡して排斥せんとした所に存してゐたのである。そこで聯盟黨員は、之に對して一七九九年八月にフランスからマインツ市に派遣されたラカナル Jacques 總督に頼つてルヴァル將軍一派の者に對抗する必要を生じた。しかして此の新任のラカナル總督はジャコベン主義者であつたので、聯盟黨員は總督の權力に依つて反對黨の抑壓を願はうとし、早速總督に現狀を訴へた。そこでラカナル總督は之に應諾し頗る強硬な態度を以て先づライン左岸の四縣に戒嚴令を布き、大小の都市村落を問はず苟も總督管轄區域内に於いては、絶対に共和主義に敵對してはならぬと云ふ嚴命を下した。此の總督の嚴命に驚いた都市村落の人々は、かのフランスの恐怖時代を想起し、心ひそかに今回の暴命を憎んだのである。殊にコーブレンツ市では、王黨と覺ばしき者や外國公使に對しては家宅搜索が行はれ、僧侶や

(271)

(272)

舊官吏は嚴重に禁錮され、教會は閉鎖を命ぜられ、又た外出の際フランスの帽章を着けないで街を歩いた婦人子供は取調べられた。

かくの如く聯盟黨員がラカナル總督に援助を求めた結果、こゝに極端なる事態を惹起するに至つたのである。そこでコーブレンツ市民は、斯る事態を見るに至つたのは、全く聯盟黨員、殊に彼等の中で市廳の役人になつてゐる連中の企に外ならぬと考へて大に憤慨した。其れは尤もな事であつた。といふのはライン左岸がフランスに併合されてから、コーブレンツ市廳の役人は、皆聯盟黨員によつて占められ、一七九八年七月以來、市廳は恰も彼等聯盟黨員の俱樂部の如き觀を呈してゐたからである。市民は日頃より之を深く不満とし、機會さへあれば彼等に復讐しようと思つてゐた所、偶々其の機會が到來したのである。

其れは一七九九年十月三日の夕刻愛國俱樂部の黨員たちが大行列を行つた。これは同年九月二十五日チューリッヒ Zürich に於けるマッセナ將軍 Masséna の戰勝を祝賀するために行はれたものであつたが、其の行列が亂暴狼藉を極め、日頃貴族主義者と目されてゐた人の邸宅の窓に投石したり、或は市民に危害を加へたり、或は又フランス官吏たちに暴行を加へたりなどした。茲に於いてコーブレンツ市駐在司令官ルヴル將軍は、翌朝に至り、此等不良の愛國黨員を盡く市廳より放逐することを市民に勸告したが、市民は市廳の役人中、勢力を有する聯盟黨員を極度に怖れ、敢て之を斷行する者は無く、

寧ろ安寧秩序の恢復を願ふため、ルヴル將軍に戒嚴令布告の必要なることを切望して來た。仍て同將軍は其の乞を容れて十月十一日に戒嚴令を布いて、市廳の事務を中止せしめ、聯盟黨員の中心人物たるギェルレスを捕縛し之を留置した。それはギェルレスがラカナル總督の援助を得るために二三の黨員を伴つてマインツ市へ赴かうとして出奔せんとしたところを捕へられたのであつた。

しかしながら此の事件を知るや否や、ラカナル總督は巴里總裁政府に全權委任を求め、十一月一日にコーブレンツ市に來たり、直ちに監禁されてゐた聯盟黨員を釋放し、戒嚴令を解いてしまつた。そして市廳を閉鎖し、別に有能なる四人の特別委員を選んで事務を處理せしめることにした。かくの如く、ラカナル總督自からの手によつて、コーブレンツ市の聯盟黨員は救はれたのであるが、彼等は其の失つた地位を取返さうとし、又、事件の當時フランス軍隊から蒙つた名譽毀損の賠償を要求し、更にフランス官吏の横暴抑壓に對する保護を得たいと主張するに至つた。しかしながら此等の要求條項や希望條件は結局巴里の總裁政府に直接陳情するの外はなかつた。そこで彼等聯盟黨員は代表者を巴里に派遣することとなり、ギェルレスが其の任に選ばれたのである。こゝにギェルレス一行は、マインツより來たアイケマイエル Ilkenyer 將軍と連れ立ち、巴里に向つて出發することになつたのである。

## 五

偕て、ギェルレスを首め此の派遣委員の一行が巴里に着いたのは、一七九九年十一月二十一日であ

(274)

つた。ところが恰も一行の到着する十二日前に所謂ブリュメール (Brumaire) 十八日の革命(十一月九日)があつて、ナポレオン・ボナパルトが總裁政府を倒して第一執政に選ばれ、今やフランスの政權はナポレオンの掌中に歸して了つてゐた。此の豫期せざりしフランスの政變は、總裁政府を信賴して巴里を訪れた派遣委員の一行を駭かせたに違ひない。而もナポレオンは、コーブレンツ市愛國黨員の要求を重んぜず、派遣委員の一行は如何にして其の使命を果たすべきかに就いて、少からず躊躇煩悶したのである。就中ギェルレスは、此時未だ二十三歳の血氣旺んな青年思想家であつただけに、彼は巴里滞在中に最も深刻なる悲哀を體驗した。即ちギェルレスは、フランス人の浮華、輕佻、無氣力な生活振、又革命の理想であつた自由、平等の精神が、毫も重んぜられてゐない事などを實地に目撃して、初めてフランス人の國民性が、如何にラインランドのドイツ人と違つてゐるかと思ふことを認識したのである。ギェルレスが「過去は唯だ眩惑的な且つ破壊的な計畫のみを提供し、未來は唯だ暗澹たる不安定な形像のみを提供した。吾々の使命は祖國の内部的狀態を改善し而して祖國の外部的地位を安全にすべきであつた」と書いてゐるのは、當時の偽らざる心境を物語つてゐるものである。即ち、今まで革命の主義や理想を世界市民の立場に於いて唯理主義的に之を解釋し且又、之を禮讃してゐたギェルレスも、革命の本場である巴里の土地を踏み、フランスを實地に目撃して、始めて革命の主義精神と、實際のフランス人の生活狀態との間に、大なる懸隔のあることを悟つたのである。またラ

インランドに派遣されたるフランス官吏は、フランス人の屑であり、本國のフランス人は自由、平等の精神を重んずる理想的人間ばかりであるとのみ信じてゐた彼の豫想も、巴里滞在中に全く裏切られてしまつたのである。此事は、かつて一七九三年にゲオルグ・フォルスター (Georg Forster) が、ライプツ市の聯盟黨員を代表して巴里に往つた時に、フォルスターが受けた巴里印象とよく似てゐる。併しフォルスターよりも、ギェルレスの方が遙に大きな衝戟を受けたのであつた。而して此の巴里滞在中にギェルレスが得たる精神生活上の體驗が、實は彼の思想轉換の重要な轉機となつたものであり、且又、後年に於ける熱烈なるドイツ愛國主義者たらしめ、更にドイツ浪漫主義運動に對する精神的寄與を行ふに至るべき素因となつてゐるものと言つてよい。

そこで吾々は、ギェルレスの體驗記錄ともいふべき「巴里印象記」の内容について之を検討しなくてはならない。この「巴里印象記」は、一八〇〇年二月にギェルレスが巴里から郷里コーブレンツ市に歸つてから、巴里派遣の結果を報告するために書いたものであり、彼が巴里滞在約四ヶ月間に得たる印象や感慨が基礎となつてゐるものである。

しかしながら吾々は、ギェルレスの此の報告書を批判する前に、先づ彼が巴里滞在中に許婚のカタリナ・フォン・ラッサウルクス (Katharina von Lassaulx) に宛て、書いた手紙の内容を検すべきで

(275)

(273)

ある。それはギョルレスの素樸々の告白と心境の變化とが、そこに明瞭に現れてゐるからである。ギョルレス・シュペルダ Wilhelm Schellberg の「ギョルレス著作選集」Joseph Görres : Eine Auswahl aus seinen Werken und Briefen, Köln, 1927 の中には、ギョルレスが巴里から前記許嫁のカタリイナに宛てた手紙が三通收められてゐる。即ち一七九九年十一月二十七日付、十二月七日付、及び翌一八〇〇年一月三十日付であつて、之を通覧すると大部分は、ギョルレスが其の愛する戀人カタリイナに獻げたる眞摯なる熱情によつて占められてゐるとは云へ、然し、そこに過去を回想し戀人との眞の愛に生きようと努力してゐる所が見えるのである。そして啓蒙思想の殻を破つて、自由な創造の天地に飛躍しようといふ浪漫主義的思想の萌芽が認められるのである。私はギョルレスの此等手紙の中に、二つの主要なる思想的傾向を認める。其一はギョルレスの巴里に於ける幻滅の悲哀を告白したものであり、其二は過去の政治生活から全然離脱して彼の戀人たるカタリイナと眞實の愛の生活に徹底したいといふ欲求である。

先づ十一月二十七日付の手紙の中で、ギョルレスは巴里到着後の感想を書き送つてゐるが、これは彼が巴里到着後六日目に書いてゐるもので、恐らく巴里からカタリイナ宛に出した最初の手紙であらうと考へられる。此の手紙の中で既にギョルレスは、巴里の露々たる雑踏や物騒がしい巴里市民の日常生活から不愉快な印象を受けたことを物語つてゐる。そして彼の理想に合ふところの人間のゐないこ

(274)

とを嘆じてゐる。殊に自分の心の空虚は、益々大なる許りで、其れを充たして呉れるものは一つもないと悲しんでゐる。そして此の心の空虚は彼が言つてゐる如く、嘗てコーブレンツ市で監禁された時に感じたものと同様のものであつて、其れが益々増大する一方であると告白してゐる。彼が實際如何に寂寞の感に打たれて煩悶したかといふことは、次のやうなことを書いてゐる事によつて明らかである。「あゝ自分は幾度も／＼吾が愛するラインの流域を想起した。しかし其事に想ひ耽つてはならぬと思つて此の感情を抑へつけた」と記してゐるが、これは自己の重大なる派遣の使命を果たさなくてはならぬと考へて、望郷の念を制したものであらうと思はれる。確にブュームール革命直後の巴里の人心は荒んでゐたから、ギョルレスの理想としてゐたやうな道徳的に完全な人間を見出すことは勿論困難であつた。彼が同じく手紙の中で「自分は道徳的に完全な人間に憧憬した時代があつたが、今や其の陶醉した幸福な時代は永へに去つてしまつた」と慨嘆し、「彼等(フランス人)の偶像は利己主義であり、彼等の専念に没頭するものは奸計であり、彼等の唯一の業務は狂奔と娛樂である」と憤懣の情を洩らしてゐる。而してギョルレスが巴里で味はつた此の現實的不満は、唯だカタリイナに獻げる愛によつて取除かれるものと信ずるに至つた。其れは彼が此の手紙の中で、「若しお前と自分とが、自分を取巻いてゐる對象の新しい世界に一緒に居るとすれば、自分の心の空虚は完全に取除かれるであらう」と言つてゐるのを見ても分るのである。

(278)

次に十二月七日付の手紙の中では、前にも増してギョルレスの沈痛な氣持が隨處に窺はれる。即ち手紙の最初に次のやうなことを書いてゐる。「あゝ自分は、もうお前を自分の子供だと呼びたい位だ。といふのは自分は散々苦勞をして年を取つてしまつたからだ。自分が歸る時には頭は銀髪になり髯は白くなつてゐるだらう。そして杖にすがつて歸るだらう。今までのやうに、もう世界をまともに見ようとは思はない。また自分の氣持を不愉快にする人々に反抗しようといふ氣も起らないし、世人と面と向つて眞理を口にしたりする氣も起らない。自分は何もしたくなくなつた」と書いてゐる。そして更に、今の自分の氣持としては、強者の前に跪き、且つ如何なる愚者の言にも共鳴し、また如何なる偏屈漢にも頭を下げることを辭せないであらうと云ひ、且又、自分が歸つて官職に就くとすれば、自分は老人に向いた役目を選ぶから、お前は自分が肥るまで自分を養つてくれないけない。といふやうな事を書いてゐる。これに據つてみると、ギョルレスの意氣は非常に銷沈してゐることが分る。そしてナポレオンに關することは何も書いてゐない。併しながら頭髮が白くなるまで苦心をしたなどと書いてゐる所から推すと、そこに多少の誇張はあるにせよ、巴里滞在中のギョルレスは今までにない苦しみを味はつたものと想はれる。しかし又一方では、巴里見物の感想を述べてゐる。彼は巴里の繪畫館へ往つて美術の傑作を見たが、就中ラファエル (Raphael) の神品には感激したらしい。また有名なグラント・オペラも見だが、たゞ歌手の唄聲が耳に騒々しく響くばかりで、自分には一向分らない

と書いてゐる。しかし舞踏だけは頗る氣に入つたらしく其の輕快な魅惑的な踊り方は、とても想像だに及ばぬ所だと激賞してゐる。其他カタリイナに對して自己の寂寥を慰へてゐるのは前便と同様であるが、革命は全然失敗に歸し何等人類を改善したところは無いと歎息してゐる。

翌一八〇〇年一月三十日付の手紙は、前の二通に較べると長文のものであり、殆ど全文がカタリイナに對して獻げられた愛情の披瀝で充たされてゐる。併し吾々は此の中に最も純眞にして人間的なギョルレスの全貌を窺ふことが出來ると共に、彼が今まで囚はれてゐた啓蒙思想の型から脱却して、深い自己反省の境地に到達してゐるところが見られるのである。そして人間の最高の生活は、眞の愛を自覺して始めて達し得らるべきだといふ彼の心情が隨所に溢れてゐることを發見することが出来る。ギョルレスは彼の過去を回想して「自分の生涯の幸福なる時代」と稱してゐるが、それはギョルレスの書いてゐる所によれば、第一は初めてカタリイナを知つて彼女から限りなき愛の生命を感じた時である。第二はフランス革命の自由の精神がラインランドを風靡した時である。ギョルレスは斯る過去を反省して、「あの時、自分は革命に對する純眞な感激と、又御身に對する熱烈なる愛情とが自分の胸中に充滿して欣喜奮躍した。しかし自分は、餘りにも革命思想に没入して一時御身を忘れたやうに見えたが、革命も終結して平和が到來すると、御身に對する自分の愛は、昔日にも増して深いものがある。今後は唯々二人の愛によつて將來一層幸福な生活をつくらなくてはならぬ」と書いてゐる。

(279)

(280)

以上の如くギェルレスが巴里滞在中に、彼の郷里にゐるカタリイナに宛て、書いた手紙の中に、既にギェルレスの革命思想の轉換が認められるのである。殊に彼の思想が聽ては浪漫主義に轉向して行くべき其の素因が、早くも此處に見出されるのである。之を要するにギェルレスは、巴里に来て、從來彼が感激し崇拜してゐた偶像から面を背けるに至つたのである。そして始めて自己自身、自己の生れた故郷、ひいては祖國といふものに對する關心が喚起されたのである。かくの如くギェルレスの思想的轉機は、實に彼の巴里滞在中のことであつたと認めなくてはならない。

## 六

偕て最後に吾々は、ギェルレスの「巴里印象記」に現れてゐる彼の思想に就いて見なくてはならない。しかしながら、ギェルレスの思想的轉換の上から云へば、この「巴里印象記」は、ギェルレスがカタリイナへ宛て、書いた自己告白のそれと感情的には一貫せるものであつて、其の間何等の區別は認められない。たゞ併し「巴里印象記」は、一八〇〇年二月、ギェルレスがコーブレンツ市に歸つてから、聯盟黨員に巴里派遣の始末報告として發表したものであり、またギェルレスは一度此の小冊子を公にするや、驟然として從來の政治運動と絶縁してしまつたのである。此の意味において「巴里印象記」は、ギェルレスの青年時代に於ける革命思想の決算書とも謂ふべきものである。彼は之を發表すると同時に「愛國俱樂部」からは脱退して、故のギムナジウム (Gymnasium) (フランスの統治となつ

てからは *Geolo secundaire* と改稱) の理科教授として専ら化學の研究に没頭し、後一八〇六年より一八〇八年に至りハイデルベルヒ大學時代にアヒム・フォン・アルニム Achim von Arnim やクレメンス・ブレンタノー Clemens Brentano と相知り、ドイツ浪漫主義の運動に参加するやうになるまで、ギェルレスは主として自然科学の研究に没頭してゐたのである。

ところで先づギェルレスの「巴里印象記」の内容は次の如くに要約できる。即ち第一はフランス革命に對するギェルレスの立場、第二は革命の終結とナポレオンの新權力、第三は「ライン河は獨逸のものなり」と云ふギェルレスの祖國愛への覺醒である。

彼は先づ最初に、ブリュメール革命直後の巴里の状態を記して、コーブレンツ市民に其の事情を懇へてゐる。即ち「余の巴里への旅行は、恰も革命の記憶すべき時代の一に遭遇した。劇的一幕が演じ了つて新しい劇が始まつてゐた」と述べ、フランス人の放縱淫靡、輕躁浮薄の風を嘲弄罵倒してゐるが、これはカタリイナに宛て、出した手紙の中に現はれてゐると同様の悲憤である。しかしながら巴里派遣の結果については次の如く報告してゐる。即ち「余の派遣は公のものであつたから、余は余の目撃した事を市民諸君に公表しなければならぬ。併し余の見物したことを残らず諸君に知らせることは出来ない。唯だ余は宮廷の佞臣の如く阿諛甘言を用ゐることを好まない。余は何人にも屈せず率直に余の信ずるまゝの事を報告するのみである。」と冒頭して彼自身の革命觀の變遷に言及し、「余は青

(281)

(282)

年時代の最初に、共和政治の理念と人類の政治的位置及び其の社會的狀態を改善せんとする理念とが、余の全身と融合した。余は熱情と没我を以て之に傾倒し、余の最初にして最善の生命力を之に向つて傾注し、唯其れによつてのみ生活し、且つ余の内部的性向の均衡を計つた。されど余が眞の人間生活に着眼したる時、斯る信念を斷念しなければならなかつた。また巴里の現状を見て、其處に既に自由の失はれたることを認め、しかして吾等をして其の人間生活及び人間性を賞讃せしめ來たれる此の大都會は、既に死亡し、現在でなく將來にのみ希望の存する事實を認めたる時、余はこれ迄爲し來たりしことが餘りにも突進的であつたことに思ひ着いた。余は余の確信を棄て去らなくてはならなかつた。余の胸奥に切り込まれたる大なる決裂及び余と外界との間を遠ざからしめたる龜隙とを、再び充たしてくるものは何であるか。余と共に同一の主義目的を以て團體的行動を共にされたる他の多くの人に、余は此の機會に一の新しき立場を定められんことを勧告する。」と云ふ意味のことを述べてゐる。

次にギエルレスは、ナポレオンの斷行したブリュメール十八日のクーデタ coup d'état を以て、フランス革命の大團圓を告げるものとし、自由の理想が永遠に葬り去られたものと觀じてゐる。そして此の見地からフランスの共和政治の時代を否定し、ナポレオンの獨裁政治の出現を豫言してゐるのである。彼は次の如き比喩を以てフランス革命の結末を述べてゐる。「革命は空中に舞上つた風船のやうな

ものであつた。それが空中に昇つて嵐や雷に逢つて爆發して地上に墜ちたのだ」と云ひ、また「十八世紀の終りにフランス國民は、非常に高尚な天分の領域に達した。そして大なる業績を成し、能ふ限りのことを爲した。しかし忽にして時勢は變轉し、フランス人自からが之を取り崩してしまつて、これまで彼等が勇往邁進して來た目的に到達しなかつた。それ故に後世の時代の人々が、其の失敗と過失とを研究し、フランス人が敢て計畫してゐた事を完成すべきである。」と言つてゐる。

しかしながら斯くの如きギエルレスの思想的轉換の言説と共に、ギエルレスが彼の祖國愛の熱情を披瀝してゐるものは、「ライン河は獨逸のものなり」といふ主張である。ギエルレスは先づ從來の地理學上の學說として海、山脈、河川等が、國家の自然的境界として定められてゐることを否定し、之に對して彼は種々なる民族の内面的道德的性質が、國境的意義を持つものだと言つてゐる。殊に各民族は夫々民族性を具有して居り、此の民族性を形成するところの最大の要素は言語である。從て言語を異にする民族は、決して相融合することが出來ない。それ故に亦た言語を異にするフランス人とドイツ人とは、元より民族性を異にするものであるから、此の兩民族の融合親和といふことは、到底行はれ得べきことでは無いといふ結論に達したのである。そしてギエルレスは更にフランス民族とドイツ民族との相違を次の如く定めてゐる。即ち、フランス人は表面的には明朗で機智に富み、且つ社交的で熱誠の溢るゝ所が見受けられるが、其の缺點としては輕薄なところがあり、物に感激し易く附和雷同する

(283)

(284)

ところがある。之に反してドイツ人は、粘着力に富んで居り、理念によつて世界を創造しようとする。即ち自己の心によつて外部から内部へ取入れた形像を、其の理念の世界に於いて凝結するのである。故にドイツの文化は内面的な性質を持つてゐる。従て内面的世界(主観)の中に於いて、多くの具體的な種々なる力といふものを意識する。その結果外部的事象を輕んずる傾向がある。何となれば、外部的事象は自己の主観生活に從屬してゐるものと信じてゐるからであると言つてゐる。故に斯くの如く本質的に民族性を異にせる獨佛兩民族は、絶對に相融合さるべきもので無く、従てラインランドに住んでゐるドイツ人は、決してフランスに併合せらるべきではない。此の意味に於いて、ライン河はフランスの國境ではなく獨逸のものであると主張してゐる。

以上が先づギェルスの「巴里印象記」の梗概である。之を要するに、ギェルスが啓蒙思想に膠着してゐた時代には、民族性の問題は、未だ彼の腦裡に浮かんで來なかつた。唯だフランス革命の理念のみに感激し、何故にフランスに、革命が起るに至つたかといふ歴史的考察を行はなかつたのみならず、フランス國民の中に潜在してゐる民族性に氣が着かなかつた。従てまた文化そのものには、文化を造り出す所の民族的精神及び特質といふものが、其の基礎になつてゐる事實を悟らなかつた。ギェルス自身が言つてゐる如く、彼はフランス革命の理念のみを受け取つて、之によつて自己の内部生命の均衡を計つた。少くとも彼が巴里へ派遣されるまでは、此の理念が彼の生命の信仰であつた。しか

しながら、巴里に於いて親しくフランスの文化及び民族性を認識して、爰に翻然としてドイツ文化に對する無限の愛着心を喚起するに至つたのである。

しかしながらギェルスが民族性の認識を主張するに當つて、此處で彼が言語及び民族精神といふものを強調してゐることは、吾々がドイツ國民主義發展の思想を觀る上に於いて注目すべき點であらうと思ふ。といふのは後にフイヒテが、「獨逸國民に告ぐ」Reden an die Deutsche Nation といふ有名な伯林講演の中で、ドイツ國民の文化的特質として、同じく言語を最も重要視し、之に論及してゐるからである。またフイヒテばかりでなく、ドイツ國民主義勃興時代に於いて、一般に之と共通した民族主義の理論が多いのである。そこで此の點から見ると、ギェルスの斯る主張は、フイヒテに先立つて居り、また後のドイツ國民主義の全般的主張の魁をなすものゝやうに思はれるのであるが、併しこれはギェルスが、革命體驗によつて得たる彼の獨創的見解であつたのでは無い。寧ろギェルスが巴里に於いて思想的轉換を體驗する以前に、知識として彼の致養の内部に滲徹してゐたドイツ文化及び其の遺産の一部分が、偶々斯る機會に於いてギェルスによつて主張され且つ表現されたものとして見なくてはならないのである。殊に其れはヘルデル J. G. Herder の歴史哲學の思想や言語論乃至民族主義の理念が再現されたものであつて、ギェルスは彼の思想轉換期に於いて、ヘルデルの著書から事實勘から影響を受けてゐるからである。従つてギェルスの世界市民主義からドイツ國

(285)



民主主義への思想的轉換については、彼の巴里に於ける體驗と同時に、一方に於いてはギョルレスがヘルデルの歴史哲學の理念から受けた知識的影響といふものを重要視すべきである。

以上、私はギェルレスの青年時代に於ける政治的活動並びに其の思想的轉換について述べたのであるが、ギェルレスが其の世界市民的世界觀を克服する上に於いて、當時のドイツ思想家のうちでも比較的に早かつたと云ふことは注意すべきことであらうと思ふ。しかしながらギェルレスの斯る精神生活上の一大轉機は、彼がドイツの「學者社會」の共有する文化の世界に復歸したことを意味するものであり、そこから新たななる第一歩が踏み出されてゐると見るべきであらう。かくして十九世紀初頭以來、ドイツ時代思想の主流となるに至つた政治と文化、國家と國民との融合一致の問題を、思想史的に解釋する時には、ギェルレスの「ドイツ文化への復歸」といふことは、單にギェルレスの個人的特殊な事件としてではなく、之をドイツ時代思想の全體的發展と關聯せしめて考察するべきであらうと思ふ。

## 【引用書目】

- ✱ Joseph Görres/*Eine Auswahl aus seinen Werken u. Briefen*, hrsg. von Wilhelm Schellberg, Köln, 1927, S. 1.<sup>73</sup>.
- ✱ G. T. Dethlefs: *Politische Zustand u. Personen in Deutschland zur Zeit der französischen Herrschaft*, Götting, 1862, S. 213-261.
- ✱ G. L. Gooch: *Germany and the French Revolution*, 1920, VI, 483-490.

1. Daxa: Einführung in die romantische Stadtwissenschaft, Jena, 1993, S. 25-27, 65-67.

※ A. Stegm. Der Einfluss der französischen Revolution auf das deutsche Geistesleben. Stuttgart u. Berlin, 1928, S. 210.

✕ F. Schudel: Deutsche Geschichte im 19. Jahrh., Bd. I, 1929, S. 237-245.

※ R. B. Lytton: *Order and the Foundations of German Nationalism*, New York 1991, chap. VII.

※ 岩波文庫版「獨逸國民に告ぐ」五九頁―六一頁。七八頁―七九頁。八〇頁―八三頁。九八頁。二〇二頁。